



2年海洋科学科10月期キャリアトライアル 「ことばの力」トライアル



＜浅尾 琢磨＞

私は、今回の集中実習を成功させるため、「注意力を保つ」「行動を迅速にする」これらの2つの目標を掲げて取り組んだ。これは、5月の集中実習の反省点である。そのため、集中実習の前日には手引きを確認したり、前回の集中実習の手引きを読み返してイメージトレーニングを行い、実習に臨んだ。

1日目の底曳網漁業実習では、「次は海洋観測だ」「次は魚の選別だ」など、常に自分ができることを探していくことに喜びを感じることができた。前回の実習と比べて良かった点は、自分から積極的に行動できたことである。

私が最も楽しみにしていた2日目の定置網漁業では、とても貴重な体験ができた。前日の疲れに加えて、朝4時起床で、定置網への移動時に眠りそうになり、しばしば先生に注意されながらも、網を引き揚げるときには目が覚め、魚が集まってくる様子に感動した。その後の漁業士交流会では、自ら漁業士の方に話しかけ、時には面白い話に華を咲かせたり、自分の知らない話を聞かせてもらうことができた。

海洋高校に帰る頃には心身ともに疲労がたまっていたが、皆「疲れた」という言葉を言わず、お互い励ましあってこの集中実習が無事に終了し、成功した。自分がまたは誰かが、「疲れた」という言葉を口にしたら、この実習は最悪の実習に終わったと思う。最後まで自分が踏ん張れたのは、2年1組の集団の力だと感じた。

私が3年生になり進路のときが近づけば、一番頼りになるのは一緒に励ましてくれる2年1組の人たちだと思った。今回のように全員が一丸となる気持ちを大切に自分の進路を切り拓いていきたい。



＜杉田 有馬＞

集中実習が始まるまでは、船酔いするかもしれないなどマイナスな気持ちが占めていた。しかし、いざ始まってみると酔うこともなく、2日間の集中実習を終えてみるとプラスの気持ちでいっぱいになった。

まず、一番初めに思ったことは、船員さんのプロ意識が高いことだ。船員さんたちは休憩や仕事をしていないときは船員さん同士で会話を楽しんで和やかな空気だが、いざ、作業が始まると空気が変わり、目の色を変え、真剣に作業を行う姿は、まさにプロだなと感じた。この切り替えは、私たち生徒も見習いたいと思った。

底曳網が上がってくるとあまりにも漁獲量が少なかったため少し残念だった。航海当直のときに伊藤船長は「今はどこに行っても魚は獲れない」とおっしゃっていた。少ない漁獲量だったが、ほぼ全員が自分から作業を見つけることができ協力もできた。

また、航海当直のときに、船員さんから禁漁区域で底曳網を操業している船もいることを聞いた。事前学習で資源回復への取組を学んでいたので、本当にそのような船がいるのかと驚いた。みんなで守る約束をしたルールなら守るべきだと思った。

私は、絶対に魚に関わる仕事に就きたいと思っているので、今回の実習は興味深いものであった。今回学んだ内容や思い出はこれからの実習や、将来の仕事に役立たせたい。

＜山崎 皓也＞

私は今回の実習で事前学習と事後学習の大切さがわかり、充実した実習ができた。

今回の集中実習が始まるまでは、不安でいっぱいだった。まず、「みずなぎ」で1泊するのが初めてで、船の揺れ具合や船内の様子が分からなかったためである。航海船舶コースの人に実習の様子を聞くと、船が揺れ、作業のときに下を向くと吐きそうになると聞き、酔い止め薬を飲んだり体調管理をしっかりと、皆の迷惑にならないようにしようと思った。また、海洋科学科の先輩から去年の時の様子も聞いて、自ら積極的にテキパキとした行動をとることを目標にして頑張ろうと思った。

実際に実習が始まり、底曳網漁業をしてみると、網を船から出して移動しているのに、何が起きているかわからなかった。海底の網を速く引っ張ることにより、魚を網の中に入れていくという単純な方法だと思っていた。しかし、事後学習で海洋センターの職員の方が製作した100分の1模型を見てみると、底曳網を引っ張る時の網の動きがよくわかった。海の底ではロープがひし形になっており、船が動くときロープが動き、そのロープにより魚が網の中へ追い込まれていくことがわかった。引っ張るスピードが早くても遅くてもいけないという、複雑な漁法だと思った。

次の日の定置網漁業のときも、最初は自分の乗った船が定置網のどこに着いたのか全然わからなかった。事前学習で模型を使っていたので、定置網の構造を理解しているつもりだったが、自分の想像以上に定置網が大きく、「本当に魚が獲れるのだろうか？」と疑問に思っていた。夜が明け、辺りが明るくなり、仕組みが見えてくると、「事前学習をしていて良かった。」と思い、その後の漁業士の方との交流でも、定置網に関する話をより興味深く聞くことができた。

私は将来、水産関連の仕事に就きたいと思っている。2種類の漁法を体験したことにより、より水産が身近になり、将来のことを具体的に考えるきっかけとなった。

